

# アトピー性皮膚炎の改善を求めてステロイドを断つ。

生後3ヶ月でアトピー性皮膚炎の診断を受け、小・中・高校、20歳を過ぎるまでずっと悩まされてきた男性がいます。人生で最も多感な時期に、身体中にできた皮膚の疾患で人とコミュニケーションさえできない。今回はそんな試練を味わった20代男性のお話しです。



アトピー性皮膚炎は、手、首筋、膝裏や脇の下などに湿疹ができるアレルギー性の疾患です。多くは乳幼児期に発症しますが、成人での発症例もあり、一度治ったように見えてまた再発することもあります。

主人公の男性Kさんも生後3ヶ月で、赤い湿疹が身体中にできたのが始まりでした。現在20代後半ですが、人生のほとんどをこの病気と向き合ってきました。Kさんの母親は、医師から「アトピーですね」と診断を受け、ステロイド薬を処方されます。以来、Kさんの患部に

訴えると、医師は薬を処方したそうです。ステロイドは、度合いによって5段階に分類されます。当初は軽い塗り薬でしたが、効きにくくなるにつれて2段階、3段階と強いステロイドを処方したのかもしれない。

ステロイドは、副腎皮質ホルモンの一つで、薬としては体中の炎症を抑えたり、免疫力を抑制したりする作用があります。しかし長く使っていると血管が拡張したり、副腎皮質ホルモン合成がうまくできなくなるなどの副作用も指摘されてきました。

中学に入ると、ステロイドの副作用を懸念して、使用頻度を控えるようにしました。するとKさんのアトピーは徐々に悪化し始めます。アトピーの改善には、保湿などのスキンケアやバランスの取れた食生活も重要です。Kさんの母親は、食事や栄養に気を使ってくれたそうですが、小中学時代はサッカー少年で食べ盛りだったKさんは、多少糖質は気にしていたものの、白米やスナック菓子、スポーツ

ドリンクなどは摂っていたようです。

あきやましんいちろう  
秋山 真一郎



医師・医学博士、カナダマギル大学臨床腫瘍学客員教授。NPO法人がんコントロール協会理事。がん免疫治療と植物栄養素を中心とした免疫栄養療法など、副作用のない多角的療法で成果を上げている。